

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	新 谷 和 幸
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>小学校社会科における「概念カテゴリー化学習」の授業構成 —学習指導過程の構築の理論と実践—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 木村 博一</p> <p>審査委員 教 授 棚橋 健治</p> <p>審査委員 教 授 朝倉 淳</p> <p>審査委員 准教授 永田 忠道</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文の目的は、小学校社会科の概念学習として、「共同体」や「安全」といった概念の名辞（カテゴリー）を探究する新たな学習方法理論を開発し、その理論を実証するための概念の設定や学習指導過程の構築、並びに学習方法理論の類型に基づく具体的な授業開発・実践を通して、今後の小学校社会科教育における有効な授業構成の理論や方法を明らかにすることである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>序章では、従来の社会科教育研究においては、事物・事象の一般性・法則性に関する知識（概念の命題）を探究する学習が概念探究学習として位置づけられてきたことを述べ、児童の発達段階を考慮すると、このような概念探究学習は小学校社会科の教育内容・方法論としては困難性が高いことを指摘している。その上で、概念の名辞を認知機能のカテゴリーとする「概念カテゴリー化学習」を提起し、小学校段階の児童でも容易に社会科の目標に迫る概念やその意味内容の獲得を可能にする本学習の意義と必要性を主張している。</p> <p>第1章では、概念の名辞を探究することの意義についての考察がなされている。まず、哲学や論理学、心理学の見地を踏まえて、概念の定義に関する考察がなされている。その上で、様々な社会事象を認知する際に用いる機能としてのカテゴリー化に言及し、カテゴリー化が複数の事象を等価なものとして一つにまとめる働きであること、カテゴリー化によって我々は様々な事象を分類・同定していることを詳述している。そして、小学校社会科における「概念カテゴリー化学習」においては、科学的概念だけでなく常識的概念をも含み込んで学習することの意義と有効性についての論述が展開されている。</p> <p>第2章では、「概念カテゴリー化学習」の学習方法理論についての考察がなされている。まず、複数の事例に見られる共通性や類似性を同一のものと判断する同定がカテゴリー化の基盤であることを確認した上で、すべてのカテゴリーは包摂的階層性を示していること、科学的概念の名辞だけでなく常識的概念の名辞も包摂的階層性に組み込まれることが確認されている。こうした考察を踏まえて、小学校社会科における「概念カテゴリー化学習」の授業では、「これって〇〇だけ？」（例えば、「特産物ってカキだけ？」）という発問で児童に類推を促すことが、より一般性のある知識として概念とその意味内容を認識するため</p>			

に有効であるという仮説が提起されている。そして、上位概念と下位概念の包摂関係を踏まえると、「概念カテゴリー化学習」は、具体的概念と具体的概念の包摂関係を認識する【具体→具体型】、具体的概念と抽象的概念の包摂関係を認識する【具体→抽象型】、抽象的概念に包摂される具体的概念を認識していく【抽象→具体型】、抽象的概念と抽象的概念の包摂関係を認識する【抽象→抽象型】の四つに類型化されることが導かれている。

第3章では、「概念カテゴリー化学習」の学習指導過程論についての考察がなされている。ここでは、オーズベルの有意義受容学習における先行オーガナイザーに着目した考察がなされ、「概念カテゴリー化学習」では、学習材の意味内容が比較オーガナイザーの比較作用と説明オーガナイザーの説明作用の両方の働きをもつ先行オーガナイザーとなり、こうした先行オーガナイザーの形成・活用を繰り返すことで、児童は習得した概念の意味内容を社会的に有意義なものとして認識できるようになっていくことが論述されている。

第4章では【具体→具体型】、第5章では【具体→抽象型】、第6章では【抽象→具体型】、第7章では【抽象→抽象型】の「概念カテゴリー化学習」の授業開発がなされるとともに、実験授業を踏まえた緻密な授業分析によって、その有効性の検証が展開されている。

終章では、第4章から第7章で詳述した具体的な授業開発と実験的検証を踏まえて、小学校社会科における「概念カテゴリー化学習」の有効性が確認されている。そして、児童の発達段階や小学校社会科の教育内容を踏まえながら、小学校社会科で学ぶべき概念についての考察がなされ、小学校社会科における「概念カテゴリー化学習」のカリキュラム編成が試みられている。最後に、今後の研究課題の考察がなされている。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 児童の社会認識の発達段階を踏まえ、児童に即した社会認識形成を促進していくという観点で、小学校社会科における「概念カテゴリー化学習」を提起したことである。社会科における概念学習は、概念を名辞としてではなく、概念を命題（一般性・法則性のある知識）の探究としてとらえる傾向が多分に見られたため、中学校・高等学校の生徒の学習には有効ではあっても、小学校の児童には困難がともなっていた。このことを踏まえると、小学校に勤務して児童に向きあっている教師が小学校社会科に固有の学習方法論を提起し、具体的に授業を開発し、実験・実証的に検討することで、学習指導理論を開発する可能性を示したことに本研究の最も大きな意義を認めることができる。
2. 小学校社会科における「概念カテゴリー化学習」の学習方法理論を構築し、「概念カテゴリー化学習」を【具体→具体型】【具体→抽象型】【抽象→具体型】【抽象→抽象型】という四つに類型化し、具体的な授業開発と授業分析に基づいて、それぞれの学習指導過程を詳細に明らかにしたことである。このことは、今後の小学校社会科の授業改善への大きな示唆をもたらすものとして高く評価することができる。
3. 本研究における論理的かつ詳細な考察を踏まえて、小学校社会科で児童が学習すべき社会的な概念の選定を試み、「概念カテゴリー化学習」のためのカリキュラム編成を試案として提起したことである。今後の小学校社会科カリキュラム構成研究の一つの基盤となる仮説を提起し得たという点にも、本研究の大きな意義を認めることができる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30 年 2 月 6 日